



# Xin chào! Xa Vinh Thoi (こんにちは！ヴィントトイ村)



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人鹿児島県国際交流協会

## は じ め に



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会  
会長 弓場 秋信  
(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成2年度にマレーシアに派遣以来21回を迎えました。本事業は、開発途上国で「国づくり、人づくりに貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し、国際協力に対する理解を深めると共に、ホームステイ等での異文化体験、学校等での現地学生との交流を通じて、国際性豊かな青少年を育成することを目的に、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿児島県OB会、公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会で実施しています。これまでに、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオスの5ヶ国に県下一円から今回の16名を含む252名の中高生を派遣しました。

今年は、7年ぶり5回目のベトナムへの派遣です。「世界の工場と消費国」へ成長する中国への依存の高まりからくる政治経済面でのリスクに対し、「チャイナプラスワン（中国一極から分散へ）」の取り組みが行われています。その1ヶ国として世界が注目し、活況を呈している国がベトナムです。ベトナムは、戦争終結後1976年南北が統一されベトナム社会主義共和国に改称されました。1992年、日本は政府開発援助を再開し、現在は日本最大の援助供与国として国際協力機構JICAによる無償資金協力、青年海外協力隊などの技術協力がなされています。政治経済面においても日本にとって重要なパートナーであるベトナムに触れ体感してほしい、そんな思いでのベトナム派遣です。

本事業の共催市である鹿児島市、鹿屋市、霧島市、枕崎市、南九州市、南さつま市から推薦の11名と、企業の協賛を得ての実行委員会推薦5名は、2回の事前研修でベトナム語、ベトナム事情、青年海外協力隊等の国際協力、日本・鹿児島について学び、期待に胸を膨らませ平成24年7月22日、7泊8日の日程でベトナムに出発しました。

団員は、在ホーチミン日本国総領事館を表敬し、総領事からベトナム事情、国際協力機構JICAホーチミン事務所長から青年海外協力隊事業等について学び、果樹園が広がるヴィントオイ村で4泊ホームステイしました。言葉・生活環境・文化・価値観等が異なる村での戸惑い・葛藤・感動、地元中学校で書道、歌、踊り、楽器演奏などの日本文化紹介と同世代との触れ合い。そして作業療法士、村落開発普及員として活動する憧れの青年海外協力隊員の活動現場を訪問しました。団員の日々の体験・感想が綴られた報告書「Xin chào ! Xa Vinh Thoi (こんにちは！ヴィントオイ村)」を作成致しましたのでご覧頂ければ幸に存じます。

終わりに、本事業実施に当たりご支援ご協力を頂いた共催市、協賛企業、在ホーチミン日本国総領事館、国際協力機構九州国際センター、JICAホーチミン事務所、心温まるもてなしで民泊を受け入れて頂いたヴィントオイ村の皆様、そして活動中の青年海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に、心より感謝申し上げますと共に、今後とも本事業へのご支援を賜ります様お願い申し上げます。

# もくじ

## はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場秋信	
ごあいさつ	1
鹿児島県観光交流局長 福壽浩	
第21回（平成24年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要	2
参加者団員等名簿	3
スケジュール	4
地図	5
体験事業ドキュメント（総集編）	6
～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～	
団員が感じたこと	14
「僕が見たベトナム」	生駒千芳
「体験事業を通して」	牟田京実
「ベトナムで異文化体験」	久保田希歩
「未知の扉」	松元理菜
「忘れない、この夏休み」	籠原莉子
「異文化体験」	川畑明良
「初めてづくしのベトナム」	丸谷尚生
「ベトナムで学んだ事」	石丸寧々
「ベトナムでの1週間」	西野奈那
「国際協力体験事業に参加して」	西紗央里
「ぶらりベトナムの旅」	池田朱里
「新しい世界」	黒坂愛梨
「ベトナムが教えてくれたこと」	白鳥翔子
「ベトナムで得た大切なものの」	恵亜生
「はじめての経験」	千竈佐保
「一番思い出深かったこと」	林みな子
団長報告	30
「それぞれの成長～団長の日記より～」	
桑山昌洋（青年海外協力隊 鹿児島県OB会 会長）	
同行者感想	31
「ベトナム訪問に同行して」	森山健二
「鹿児島県青少年国際協力体験事業の効能」	山下美穂
「次の一步へ」	力竹貴子
「思い出深いベトナムでの日々」	福盛三南美
「同行取材を終えて」	松本直也
新聞記事	36
特別寄稿	
第14回（平成17年度）参加者	渡邊博人
参考資料	
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要	44
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績	45
第63回南日本文化賞（社会教育部門）受賞	46

## ごあいさつ



鹿児島県観光交流局長

福 壽 浩

平成24年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、鹿児島の青少年を開発途上国へ派遣し、それらの国の経済的・社会的発展に貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や、現地で協力活動体験を行うことで国際協力に対する理解を深めるとともに、現地の人々との交流を通じて相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成することを目的としております。

成長著しいアジアの時代の到来を見据え、同地域の環境、経済、多様な文化などに精通した人材を育成するため、県でも様々な施策を積極的に推進しておりますが、現代の国際社会を取り巻く諸問題を解決していくためには、国民一人ひとりが自らの国や地域について見つめ直すとともに、異なる文化・習慣・考え方などについて理解を深める姿勢が重要になってきております。

第21回目となる今回の体験事業では、団員の皆さんには、7月22日から7泊8日の日程でベトナムを訪問し、現地視察や隊員との懇談などを行いました。試行錯誤を繰り返しながら活動に従事する青年海外協力隊員の姿を目にし、また、ホームステイや地元の学生との交流等で現地の方々との心のふれあいを体験したことでの、国際協力や相互理解の必要性、重要性を実感されたのではないかと思います。

自らの目で見て、感じてきたことは、実際にベトナムへ足を運ばなければ経験することのできない大変貴重な経験です。この貴重な体験で得た感動を心に深く刻み、今の自分たちには何ができるかを考え、是非身近なところから取り組んでいただきたいと思います。そして将来、国際性豊かなくましい若者に成長されることを心から期待しております。

最後に、この事業を主催された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会を構成する各団体及び実施に当たり御支援・御協力をいただきました外務省、国際協力機構九州国際センター並びに青年海外協力隊の皆様に心から感謝を申し上げますとともに、関係者の皆様の今後ますますの御発展を祈念いたします。

## 第21回（平成24年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- 1 主催 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会  
※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会  
青年海外協力隊鹿児島県OB会  
公益財団法人鹿児島県国際交流協会
- 2 共催 鹿児島市、鹿屋市国際交流協会、霧島市国際交流協会、枕崎市教育委員会、  
南九州市教育委員会、南さつま市友好交流推進協議会
- 3 後援 鹿児島県  
鹿児島県教育委員会  
独立行政法人国際協力機構九州国際センター
- 4 協賛 (株)鹿児島銀行 鹿児島空港ビルディング(株)  
鹿児島トヨタ自動車(株) 鹿児島ヨコハマタイヤ(株)  
キンコー醤油(株) 小正醸造(株)  
薩摩酒造(株) (株)下堂園  
太陽運輸倉庫(株) 南国殖産(株)  
(株)ミサカ (株)Misumi  
(株)山形屋 弓場貿易(株)
- 5 事業の流れ 4月～5月 募集・団員決定  
6月9日（土） 第1回事前研修  
6月30日（土）～7月1日（日） 第2回事前研修  
7月22日（日） 出発  
7月29日（日） 帰国  
7月29日（日）～8月3日（金） 表敬訪問  
8月18日（土） 報告会  
9～10月 報告書作成
- 6 派遣国 ベトナム社会主義共和国
- 7 派遣期間 平成24年7月22日（日）～7月29日（日）
- 8 派遣人員 (1) 参加者 16名  
(2) 引率者 6名

## 参加者団員等名簿

### ■団員

	名前	性別	学 校	学年	市 町
1	い 生 駒 千 芳	男	鹿児島市立甲東中学校	1	鹿児島市
2	む 田 京 実	女	国立大学法人 鹿児島大学教育学部附属中学校	1	鹿児島市
3	く 保 田 希 歩	女	私立鹿児島純心女子高等学校	2	鹿児島市
4	ま つ 松 元 理 菜	女	鹿屋市立鹿屋中学校	3	鹿屋市
5	か ご 笠 原 莉 二 子	女	枕崎市立桜山中学校	1	枕崎市
6	か わ 川 畑 明 良	男	枕崎市立枕崎中学校	1	枕崎市
7	まる 丸 谷 尚 生	男	枕崎市立枕崎中学校	2	枕崎市
8	い し 石 丸 寧 々	女	霧島市立陵南中学校	2	霧島市
9	に し 西 野 奈 那	女	鹿児島県立鹿児島水産高等学校	2	南さつま市
10	に し 西 紗 央 里	女	南九州市立青戸中学校	2	南九州市
11	い け 池 田 朱 里	女	鹿児島県立加世田高等学校	3	南九州市
12	くろ 黒 坂 愛 梨	女	鹿児島県立松陽高等学校	3	指宿市
13	しら 白 鳥 翔 二 子	女	鹿児島県立志布志高等学校	2	曾於市
14	めぐみ 恵 垣 生	女	鹿児島県立大島高等学校	3	奄美市
15	ち 千 竜 佐 保	女	鹿児島県立加治木高等学校	1	姶良市
16	は やし 林 み な 子	女	鹿児島県立種子島中央高等学校	2	中種子町

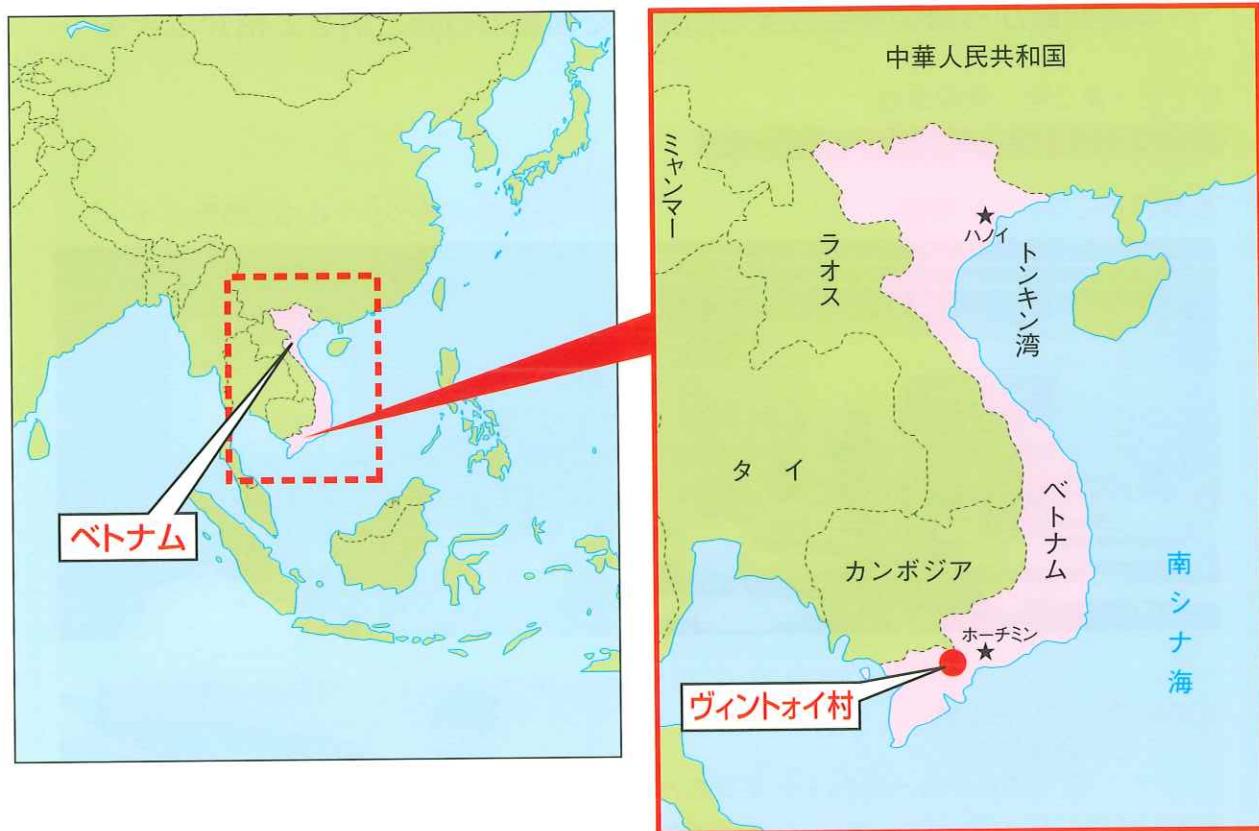
### ■同行者

		名 前	性別	備 考
1	団長	くわ 桑 やま 山 昌 洋	男	青年海外協力隊鹿児島県〇B会 会長
2	調整	もり 森 やま 山 健 二	男	公益財団法人鹿児島県国際交流協会 事務局長
3	健康管理	やま 山 下 美 穂	女	青年海外協力隊ベトナム〇G (助産師) 鹿児島純心女子大学看護栄養学部講師
4	調整	りき 力 竹 貴 子	女	青年海外協力隊ニジェール〇G (小学校教諭)
5		ふく 福 盛 みなみ 三南美	女	南日本新聞編集局社会部 記者
6		まつ 松 本 直 也	男	鹿児島放送報道制作局報道部 記者

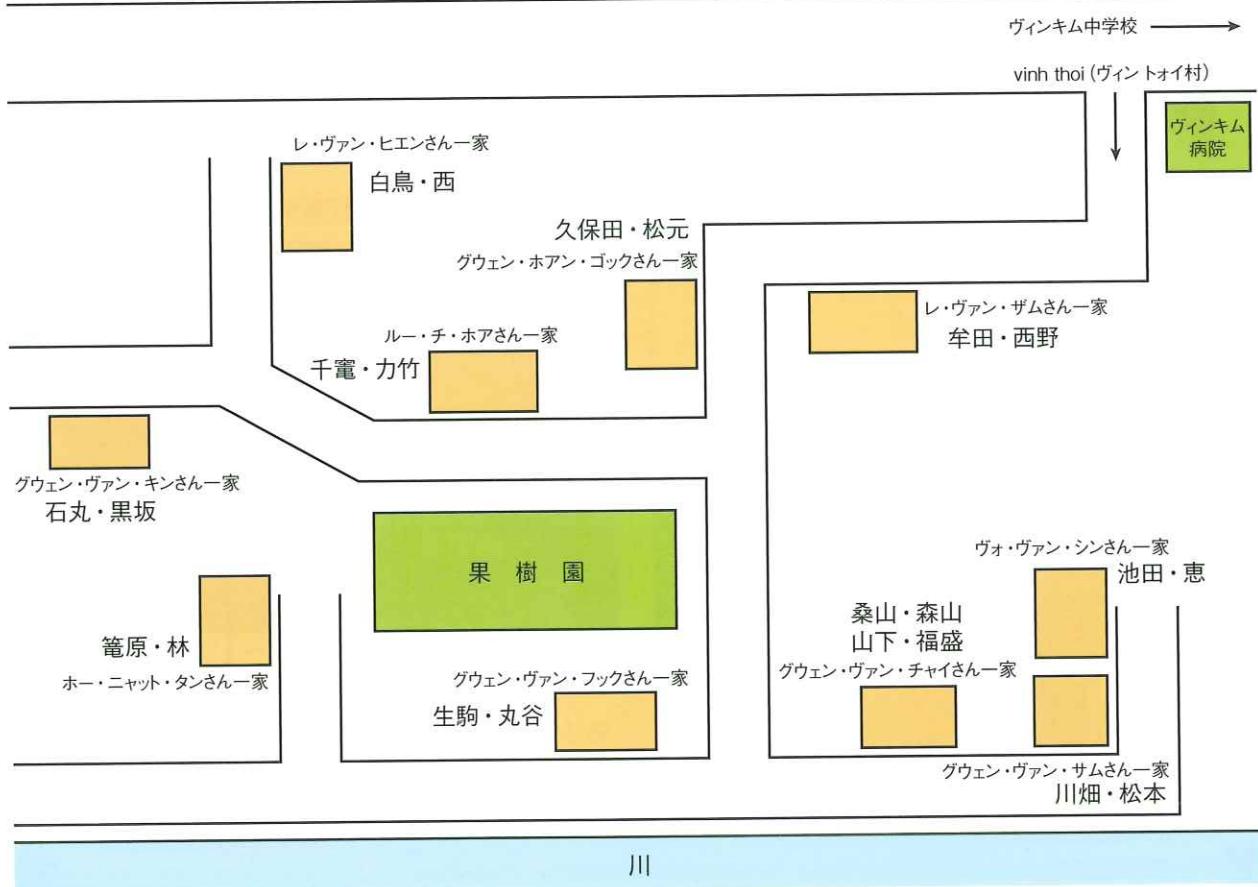
## スケジュール

月日	曜	地名	時刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月22日	日	鹿児島空港 ソウル(仁川空港) ソウル(仁川空港) ホーチミン (タンソンニャット空港)	13:00 15:55発 17:30着 18:55発 22:05着	KE786 KE683 バス	集合・チェックイン・結団式  ホテルへ移動	ホテル
7月23日	月	ホーチミン ヴィントオイ村	11:00-12:00	バス	在ホーチミン日本国総領事館 表敬  午後：昼食 ヴィントオイ村・ホームステイ先へ移動 ホストファミリーとの対面式	ホームステイ
7月24日	火	ミトー市	9:00	バス	午前：青年海外協力隊員活動視察 ティエンザン省総合病院 隊員：後藤 沙織（作業療法士）  午後：現地中学生との交流会	ホームステイ
7月25日	水	タンビン郡 ヴィントオイ村	8:00	バス	午前：青年海外協力隊員活動視察 ビンロン省農業開発局 隊員：館野 友子（村落開発普及員） (モデルファームにて活動視察)  午後：ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月26日	木	ヴィントオイ村			終日：ホストファミリーと過ごす  夜：お別れ会	ホームステイ
7月27日	金	ホーチミン		バス	午前：村とのお別れ 午後：ホーチミン市内のホテルへ移動 水上人形劇鑑賞 現地派遣中の青年海外協力隊2名と懇談	ホテル
7月28日	土	ホーチミン ホーチミン (タンソンニャット空港)	9:00 23:35発	バス KE684	終日：ホーチミン市内観光	機内泊
7月29日	日	ソウル(仁川空港) ソウル(仁川空港) 鹿児島空港	6:35着 13:00発 14:35着	KE785	解団式(国際線ロビー)	

# 地図



## ヴィントトイ村 ホームステイ先



# 体験事業ドキュメント(総集編)

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

## 第1回・第2回 事前研修

6月9日(土), 6月30日(土)～7月1日(日)

### 国際協力についての勉強



### 《体験談》

青年海外協力隊ベトナムOG門野さん



### 語学研修(ベトナム語) ベトナム人留学生の マイさん・しーさん・ヒエンさん



### 語学研修成果発表(家族の紹介)



### 出し物の練習



ベトナム語講座などで、ベトナムのこと  
を少しわかることが出来ました。留学生  
とも会話が出来たので楽しかった！

篠原 莉子

7月22日（日）

結団式・出発



鹿児島空港国際線ターミナル



7月23日（月）

在ホーチミン総領事館表敬訪問



たくさんの人たちと接して、国際教養を高めて日本に戻りたい！

久保田 希歩



国際協力や日本とベトナムの関係についてお話を聞きました。自国の文化を知ることも大事だと学びました。

西野 奈那

ホームステイ先・ヴィントオイ村到着



ホストファミリーと初めて過ごす夜



7月24日(火)

青年海外協力隊員活動視察  
ティエンザン省総合病院 訪問



復職隊員：作業療法士



将来、私も発展途上国の  
人々のために役立つこと  
をしたいと思いました。

林 みな子

いきいきとやいがいを  
感じながら努力・活動  
する隊員がかっこよく  
私の目に映りました

千電 佐保

現地中学校との交流



みんなで英語で  
積極的に交流出来た！

川畠 明良



リーラン節を披露

おはら節と一緒に踊りました。

7月25日(水)

青年海外協力隊員活動視察  
モデルファーム訪問

館野隊員：村落開発普及員

私が現地で多くの果物を御馳走になれたのも、  
館野さんの活躍のおかげなのかなと思いました。

松元 理菜



ヴィントトイ村



ホストファミリー  
と日本語と英語を  
教え合い、日本語  
教師になりたいと  
いう想いが強くな  
りました。

池田 朱里

現地英語教室



7月26日(木)

ホストファミリーと過ごす



もうひとつ  
の大切な家  
族ができま  
した。

東 亜生



日本食を  
作りました！

石丸 寧々



お別れ会



コーディネーター渡邊  
さんの奥さまに浴衣の  
着付けをしました！

黒坂 愛梨

ベトナムの地で出会っ  
た人、国際交流で共に  
過ごした人、全ての縁  
に感謝したい。

丸谷 尚生



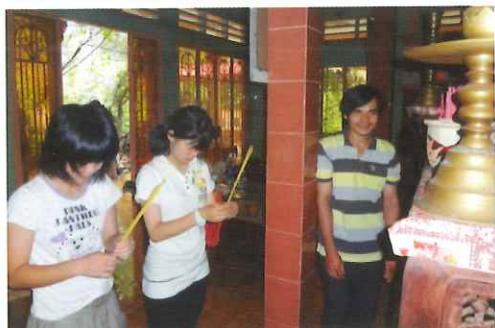
7月27日(金)

### 村とのお別れ



最後に仏壇にお祈りをしました！ベトナムでは、食事の前にいつもお祈りをしていました。

牟田 京実



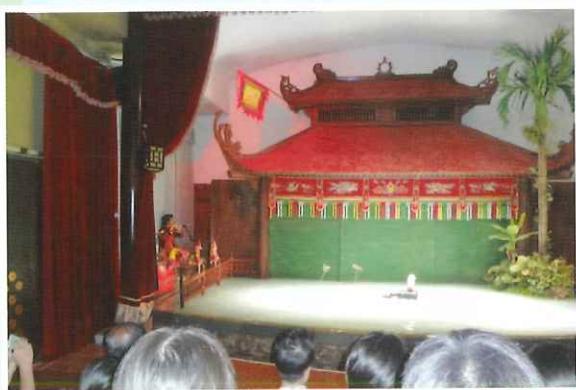
### 現地の病院にて活動中の青年海外協力隊員2名を招いて食事



渡邊隊員（作業療法士）

本丘隊員（看護師）

### 水上人形劇鑑賞（ホーチミン市内）



7月28日(土)

ホーチミン市内観光

最近まで戦争があつたとは思えぬくらい、ホーチミンはにぎやかで建物も新しかった。

白鳥 翔子



戦争証跡博物館前にて



韓国（仁川空港）



7月29日(日)

解団式



かみオン  
(あいがとう)

8月2日(木)・8月3日(金)

表敬訪問

こんなに多くの企業や団体がサポートして下さっているのが驚きました。本当にありがとうございました。

西 紗央里



8月18日(土)

報告会



両親や一緒に参加した団員・同行者の皆さんに感謝します。

本当にありがとうございました。

生駒 千芳

## 団員が感じたこと

### 僕が見たベトナム

甲東中学校 1年 生駒 千芳

ぼくがベトナムに行って、印象に残っていることは、三つあります。

一つ目は、バイクが多いことです。

日本では、自動車が多いのですが、ベトナムは、バイクの方がだんぜん多かったです。バイクは、バスや車より小さいので、車と車の間をすいすい進めます。でも、車とぶつかり、事故がおきるかもしれません。なので、移動中のバスの中には、クラクションの音が鳴りひびいていました。

そして、おどろいたことがあります。

一台のバイクに三～四人一度に乗って走っていました。二人乗りでも、後の一人が、大きな窓ガラスや人が二人入れるんじゃないかと思うくらい大きな荷物を持って、見事にバランスをとって、普通に道路を走っていました。すごくおどろきました。そして、そのバイクの乗り方（三人乗りなど）は、日本でしたら、警察につかります。でも、ベトナムの人々はその乗り方で、警察の前をどうどうと走っていて、しかもそれをベトナムの警察は、つかまえませんでした。ぼくは、すごくおどろきました。

でも、家族みんなでバイクに乗るほど、ベトナムの人々にとって、バイクは、身近で、大切な物なんだなと思いました。

二つ目は、ベトナムの料理です。

まずベトナム料理のほとんどにつけて食べる調味料が、醤油です。醤油といつても、日本の醤油とはちがいます。日本の醤油は大豆から、醤油を作ります。なので、くさみもありません。



本人：右から2番目



ベトナム料理

ベトナムの醤油は、魚からできていて、くさみがつよく、ぼくはあまり好きではありません。

ベトナムでは、川の魚や春巻きなど、色々な物を油であげて食べていました。ぼくは油をとりすぎてお腹が痛くなりました。

そして、一番おどろいたのが、ぼくのホームステイ先のヴィントオイ村のホストファミリーの朝食に、めん類の「フォー」が、出ていたことです。日本では、あまり朝食にめんが出ないので、おどろきました。ベトナムにはフランスパンがよくあって、そのフランスパンをフォーの汁につけて食べたりもしました。

三つ目は、農村のシャワーや水道、電気の供給です。

ぼくがホームステイしたのは、ヴィントオイ村という農村です。

その村は、ほとんどの家で、シャワーがこわれていて、お湯は全く出ませんでした。なので、村の人々は、水で体を洗い流していました。そして、夜になると、時々電気がきて、テレビも明かりもつかなくなります。

日本ではこういったことは、ほとんどありません。日本が先進国だからなのかもしれません、ぼくはこういう経験は初めてだったので、少し戸惑いました。しかし、ホーチミン市のホテルでは、お湯も出て、電気もついていました。まだ開発途上国のベトナムはこれからどんどん開発が進むと思いました。

ぼくは、開発途上国ベトナムに行き、異国の文化にふれることができてよかったです。今回ベトナムに行って学んだ事を、これから的生活に生かしていきたいです。

## 体験事業を通して

鹿児島大学教育学部附属中学校 1年  
牟田 京実

ベトナムでの体験事業では、一生に一度の貴重な体験をすることができました。

ベトナムは、戦争が終わったばかりにもかかわらずとても活気あふれる国です。町には戦争の爪痕が多く残っています。それでも、未来を変えていこうというベトナムの人々の力強さに感心しました。

私達16人のホームステイ先は、ホーチミン市から80キロほどはなれた所にあるヴィントオイ村です。ヴィントオイ村は、果物の栽培がとても盛んな村です。ホストファミリーは私達をとても温かく迎えてくれました。ホームステイ初日は、なかなか自分から話しかけることができませんでした。しかし、一緒に過ごしていくうちに緊張もうすれ、ジェスチャーや持参していた会話帳などを使ってコミュニケーションを図ることができました。自分の伝えようとしていることがホストファミリーにしっかり伝わった時には、言葉の大切さを改めて感じました。

ホームステイ先では多くのベトナム料理をホストマザーが作ってくれました。その中で日本との食文化の違いを強く感じたのが米です。日本の米は水分を多く含んでいます。しかし、ベトナムの米はとてもパラパラしていて、チャーハンのようでした。ベトナム料理にもその米が使われています。フォーという日本で言えばそうめんとラーメンによく似た食べ物です。ベトナムの朝食によく出される食べ物で、とてもあっさりしていておいしかったです。

ベトナムの多くの家庭が仏教を信仰しています。私のホームステイ先でも仏教が信仰されていました。家



現地学校交流にて 本人：左

の中心部には大きな仏壇が置かれしていました。私のホストファミリーのおばあちゃんは、早朝から仏壇に向かってお祈りをしていました。ベトナムでは食事前に必ずお祈りをするそうです。日本ではお祈りの時間は決められていません。日本との文化の違いを生活の中で感じました。

ベトナムでは、ホームステイだけではなく現地の中学生との交流も行いました。お互いの国の文化を紹介し合いました。私達はベトナムの歌を一緒に歌ったり、ソーラン節を披露したりしました。短時間の交流でしたが、お互いに打ち解けて文化の違いを肌で感じながら楽しみました。

青年海外協力隊の後藤隊員と、館野隊員の活動視察も行いました。日本のためだけではなく、他の国のために進んで行動できる隊員の方々に本当に感心しました。将来、自分も協力隊になりたいと強く思いました。

ベトナムでは、本当に多くの事を学んでくることができました。支援して下さった方々や同行者の方々に本当に感謝しています。ベトナムでの体験事業で学んだことをこれからの生活の様々な場面で生かしていきたいです。そして、国際交流などに積極的に参加し、外国の多くの文化にふれていきたいです。様々な面で支えて下さった方々に本当に感謝しています。ありがとうございました。



戦争記念博物館 本人：前列中央

## 団員が感じたこと

### ベトナムで異文化体験

鹿児島純心女子高校 2年 久保田希歩

私はベトナムを訪れてベトナムの人の温かさ、そして何よりベトナムという国の素晴らしさを学びました。行く前は緊張や、汚いのかな、生活できるのだろうか、と心配なことばかりでした。しかし、ベトナムについた途端に不安が楽しみに変わるくらい街は活気づいていて、賑やか、クラクションの音が行き交うこれが私の第一印象でした。次の日、ホーチミンの総領事館を訪れてベトナムの経済状況やJICAについてなど色々な事を聞きました。話の中で一番驚いたことは、ベトナムの平均年齢が28歳ということです。日本の平均年齢と真逆で驚きました。また、ベトナムには日本の企業がたくさん進出していることが分かりました。

午後から、ホームステイ先へ移動しました。とても緊張しましたが、ベトナム語で挨拶をしてそれぞれのホストファミリーと過ごしました。ホストファミリーはどこからどこまでが家族なのかわからなかったけれど、夜になると集まって今日の出来事について話をしていましたが、ベトナム語で会話をしていたので何を話しているのかわからなかったけど、持っていたベトナム語会話帳をお父さんが持ち歩いてくれていつも会話がたえなかったです。3日目は、ティエンザン省で活動をしている後藤隊員の活動現場を視察しました。後藤隊員は、作業療法士ということで苦戦しながらも、患者に合わせた治療の普及と、ベトナム人の性格で約束の時間にこないということから、タイムスケジュールの普及に取り組んでいるということでした。活動のほかに病院の視察もしました。日本では考えら



現地学校交流にて 本人：右

れないほど衛生面が悪いというのが印象的でした。4日目は村落開発普及員の館野隊員の活動現場を視察しました。キングマンダリンを育てる上で虫の嫌うグアバの木を植えることで害虫の駆除をすると同時に、本来なら1m間隔で植えるのを4m間隔で植えることで野菜などを育てて収入を増やしているそうです。今は1本の木から10kg～15kg収穫があるそうですが、将来は50kg超を目標にしているそうです。

5日目は農作業をしたり、市場で買い物をしたり楽しく過ごしました。夜は、深夜まで英語とベトナム語を交えながら日本語を教えたり、ベトナムの結婚式の写真や、習慣など色々な事を教えてもらいました。

私は8日間かけがえのない仲間と出会い、一生体験できないことができました。村に3年後にもう一度訪れる約束をしたので、今から楽しみにしています。そして、思ったよりはるかにたくさんの日本人が活躍していて、とても驚きました。村に実際に行って、ほとんどの人が英語を喋れなかったり、発音が違ったりしました。それを見ていて、私も発展途上国で英語を教えたいたとも思いました。たくさんのこと教えてくれたベトナム異文化体験でした。



ホストファミリーと 本人：左

## 未知の扉

鹿屋中学校 3年 松元 理菜

タンソンニヤット国際空港から一歩足を踏み入れた瞬間に、熱帯独特の空気が全身を包み、違う世界に来たんだなあと実感しました。ホーチミン市内は、深夜でさえも活気があり、信号がなくバイクが縦横無尽に走り回っています。その光景からは、若者のエネルギーとパワーを感じました。

二日目の午後、私たちはホームステイ先のヴィントオイ村へバスで移動しました。まず、家族との対面の際、私待っていた人はお父さんでした。人懐こいその顔はどこなく自分のおじいちゃんに似ているような気がしました。家族は8人の大家族です。たくさんのフルーツがテーブルに並び、私たちを心から歓迎してくれました。心の綺麗な人たちと出会えて、嬉しく思いました。

次の日の午後、ヴィントオイ村から歩いて少しあるヴィンキム中学校へみんなで行きました。迫力ある太鼓の音色、そして首飾りで大歓迎してくれました。しばらくして、現地の生徒からこのような質問を受けました。「ベトナムに来るのは初めてですか？また、ベトナムの人々をどう思いますか？」とありました。私が代表して、「ベトナムに来るのは初めてです。ベトナムの人々は、おおらかな人が多くて、やさしい人ばかりです。」と答えると、現地の生徒全員が声を合わせて、「カムオン。」（有り難う）と言ってくれて、嬉しく思いました。また、ソーラン節を披露した後、ランブータンの差入れをいただきました。そして、ベトナムならではのゲームをしました。ルールは、板状の上にスリッパがついている道具を使い、2人で息を合わせて競争するゲームです。私は現地の生徒とチームを組み、優勝し、ご褒美に校長先生から飴を一袋いただき、握手をして交流を深めました。

四日目の午前中は、青年海外協力隊として農園で活動させていた。館野さんの所へ視察に行きました。館野さんは、現地の人々に、果物を虫や病気から守り、果



ホストシスターと 本人：右

物を増やす技術を教えていました。私が、果物を現地でたくさん食べることができたのも、この技術が生かされていることなのだと思います。

五日目の夕方、お別れ会がありました。みんなでベトナムの歌であるホーおじさんをベトナム語で歌ったり、豪華な食事に舌鼓を打ちました。御開きになり、ホストファミリーとの最後の夜になりました。ホストファミリーの平均就寝時間は八時前後なのですが、話しが盛り上がり、時計を見ると深夜の一時半でした。少しでも最後の夜を大切に思ってくれたことに対して感謝しています。

別れの朝、「ヘエーンガップラアイ」（また会おうね）何度も何度も言い合いながら末っ子のお姉さんの手を強く握り返しながら誓いました。あの時のお姉さんの涙を溜めたキラキラした目は忘れられません。会話はできなくても心は繋がっていました。同級生のダンも最後まで傍にいてくれました。私のスーツケースは、いとこの幼い男の子が気を利かせて無言で運んでくれていました。彼の寂しい気持ちがわかりました。私は、一步一步を大切にお姉さんと手を繋いで歩きました。時が止まったかのように感じました。もう、会えないかもしれないと思った途端、涙が溢れ出て止まりませんでした。私は自分を磨き、再びこの地で再会するために努力したいと思いました。

今回、私にとって初めての海外事業は、大変すばらしい出会いがあり、大変貴重な体験がありました。また、青年海外協力隊の方々が、世界各地で現地の人々の為に貢献している御蔭で、国際社会における日本の評価が上がり、親日家が増え、今回の私たちの交流も円滑に進むことができたのだと思います。私は、青年海外協力隊の方々のように人の役に立てる人間になるにはどうしたらよいのかを考えさせされました。そして、今後も国際交流を続け、グローバルな人生を送りたいと思います。

最後に今回、行かせてくれた私の両親、チャンスをくれた国際交流協会の皆様、同行してくれた団長を始め、スタッフやマスコミの皆様、激励をしてくれたJoel先生、担任の先生、校長先生、教育長先生、JICAの皆様、各協賛企業の皆様に感謝します。有り難うございました。



ヴィントオイ村にて 本人：左

## 団員が感じたこと

### 忘れない、この夏休み

桜山中学校 1年 篠原 莉子

私にとって特に印象が大きかった事は、ホストファミリーが作ってくれた食事です。初めて食べた時は慣れなくて残してしまう事もあったり、日本食を食べなくなりました。しかし、毎日食べているとおいしく感じました。庭にいる鳥を食べます。焼いて、塩・こしょうで味付けしたものやスープに入っていて、米と食べたりしました。

食事をするときには、必ずおじいちゃんが冷たい飲み物を出してくれました。果物をしづぼった物やコーヒーなどでした。どれも甘かった気がします。気温が高いので、いつも食事の時に出るジュースなどは楽しみでした。1番おいしいと思ったのはコーヒーです。もう1度飲みたいです。

それと、不思議だった点が1つあります。それは、私達といっしょに食べるホストファミリーは毎回1人で他のファミリーはいつ食べているのかという事です。3才の女の子と14才の女の子とおばあちゃんとは1度も食べた事がありません。どうしているのか聞けば良かったです。こういうちょっとした疑問がありますが、ベトナムでの生活は、とても充実していました。

それと、ハンモックに乗ることができたのも忘れられません。私の家にはないので良いなあとと思いました。その上で本や雑誌を読んでいると、だんだん眠たくなってきたりしました。いきおいをつけすぎて入り口のドアに頭をぶつけてしまった事もありました。

次に印象が大きかった事は、ベトナムの市場です。何の肉か分からぬけれど生肉がそのまま売っていたり、物ごいをしている人もいました。初めて見る物ば



現地学校交流にて 本人：左

かりでした。バイクが本当に近くを通るのでこわかったです。

ベトナムの家は、日本のようにクーラーはなくてシャワーのない所もあったりして、発展途上国とはどういう事なのかよく分かりました。今まで考えた事がなかったので日本の豊かさなども知る事ができました。これはあたりまえなんて思っていた事もベトナムでは、あたりまえでなかった事がたくさんありました。

普段と少し違う所で1週間を過ごすことは疲れましたがいろいろな事に興味を持つことができたし、たくさんの人と交流する事ができました。



ホームステイ先での食事

## 異文化体験

枕崎中学校 1年 川畠 明良

ぼくが青年海外協力隊について知ったのは、6年生の社会の授業の時でした。世界各地で活躍する隊員の話に、「いつか、ぼくも参加してみたい」と、とても興味を持ちました。今回、青少年国際協力体験事業に参加するのには、たくさん不安もありましたが、自分の将来の夢への第一歩になるのではと、期待がふくらみました。

ぼくたちが今回訪問した国は、ベトナムです。行く前は、まだ開発の進んでいない、遅れている国だろうと想像していました。しかし、実際に行ってみて、その考えは大きく変わりました。

ベトナムに着くと、すぐ、異国に来たな、と感じました。空港から一步外に出ると、周りの景色、聞こえてくる言葉、全てが新鮮でした。空気を吸うと、ガスっぽく、少し息苦しかったです。

ぼくがこの事業の中で、一番楽しみにしていたのは、ホームステイです。どんな家か、どんな家族か、とてもワクワクしていました。しかし、いきなりその楽しさは消え、大きな壁にぶつかりました。言葉の違いです。お母さんが話しかけてくれるのですが、何を言っているのか、全くわかりません。食事にも慣れず、悪戦苦闘の初日でした。

また、言葉も違えば、生活も違いました。お風呂はシャワーだけで、水しか出ません。食事の時に、いただきます、ごちそうさまを言わなかったり、台所にまどがあったり、庭先にわとりがいたり、たくさんの果樹があったり。人から聞いただけでは分からない、文化の違いを体感し、戸惑うばかりでした。

しかし、日に日に生活に慣れてくると、家族と、少



ホストファミリーと 本人：右から2番目

しづつ、お互いの気持ちを伝えられるようになっていました。そして、お互いのことをよく知ろうと、会話をひんぱんにするようになりました、いつしか言葉の不便さも感じないくらい、自然に過ごせるようになりました。最後、家族や村とのお別れは、本当にさみしかったです。

その中、お母さんが連れていってくれた市場で、とても印象深い出来事に会いました。

市場では、生きのいい魚や、肉、果物、お菓子などもあって、子供からお年寄りまで様々な人がいました。ぼくは家族へのお土産に、コーヒーとお茶を買いました。その時、後ろから誰かにつつかれ、振り返ってみると、小さい子供が、「お金ちょうどい」と、ベトナム語で、手を出しながら言ってきました。手には食べかけのランブータンを持っていました。こんな人もいるんだ、と何となくは理解しつつも、どうしたらしいのか分からず、一気に緊張してしまいました。

そして、この事業最大の目的は、青年海外協力隊隊員の活動現場視察です。まず訪ねたのは、作業療法士の後藤隊員でした。作業療法がなかったベトナムでの協力は、苦労も多く、反発もあったそうです。病院内も日本と比べると、清潔でないように見えました。

そしてもう一人は、村落開発普及員の館野隊員です。活動現場に来た当初は、ベトナムの人々がのんびり働いていたそうですが、今は多くの農家を回り、キングマンダリンの栽培や、グリーニング病対策をしながら、現地に合った協力をしていました。二人の努力を目の当たりにして、青年海外協力隊の役割の大切さを知ることができました。

この事業に参加してみて、日本に比べてベトナムは、不便なところもありましたが、便利な生活だけが豊かではないと感じました。そして、青年海外協力隊の活動は、現地の人々と一緒に協力しあって行われ、交流のなかでこうけん出来ていくのだと思いました。これから、この事業で学んだことを生かし、世界にこうけんしていきたいです。



ホストマザーと 本人：右

## 団員が感じたこと

### 初めてづくしのベトナム

枕崎中学校 2年 丸谷 尚生

「あっ、じいちゃんに似てる。」初めてホームステイ先のお父さんに会った時の印象だ。お父さんは、わたしの祖父に雰囲気が似ていて笑って迎えてくれた。やさしい笑顔を見て、不安でいっぱいだったわたしの心が少しずつ晴れていった。

ホームステイする我が家での初めての出来事は、ココナッツジュースだ。驚いたことにココナッツの実の先端を力一杯ナイフで突き刺し、中に入っている汁を「ジャバジャバ」とこぼしながらカップに入れてくれた。あまりの豪快さに唖然とした。ココナッツジュースは炭酸のような刺激と水に何かを足したような初めての味だった。

ベトナムは南の国らしく果物が豊富だった。不思議な形をしたランブータンが初めて食べた果物だ。ランブータンは赤くやわらかいとげがあった。食べ方がわからずおろおろしていると、お父さんが卵を割るように皮をむき白い果肉を出した。それをわたしに差し出してくれた。「カムオン（ありがとう）」とわたしは初めてベトナム語を話した。すると、お父さんはとてもうれしそうに「カゴシマ ナオ」と片言の日本語でわたしの名前を呼んでくれた。お父さんがわたしの言葉を返してくれ、初めて言葉が通じた瞬間だった。

お父さんと一緒に食べたランブータンは少し酸っぱくて夏の味がした。

お母さんは市場へ連れて行ってくれた。市場は太い魚、鳥の丸焼き、果物の山など衝撃的な物ばかりだ。人が多くにぎやかで活気がありお祭りのようである。お母さんはわたしを気づかってくれて、欲しい物や食



ホームステイ先にて



ホストファミリーとの団らん

べたい物を何度も聞いてきた。だけど、わたしは何がおいしいのかわからず返事に困った。お母さんは、たくさんの食べ物を料理して、わたしたちにごちそうしてくれた。白身魚のヌックナムはおいしかった。お母さんへは料理を任せっきりで申し訳ない気持ちと食べさせてくれた感謝の気持ちでいっぱいである。

ベトナムはこれまでの人生の中で初めて言葉の違う人と暮らした国である。その中で何かを伝えようとすることすべてに、とても時間がかった。ホストファミリーも一生懸命何かを伝えようとわたしに話しかけてきたが、わからないことが多かった。わたしは初めて言葉が伝わらない、気持ちが相手に届かないもどかしさを感じた。でも中学生と交流したときは遊ぶのに夢中で言葉などいらなかった。

わたしは言葉は通じなくても外国人の人とも心を通わせることができることを知った。

ベトナムは日本と言葉も暮らしも違いはたくさんあったが、ベトナムの人もわたしたちと同じように楽しいときには笑い、悲しいときは泣いていた。国が違っても人はひとりであり、何ら変わりはない。ベトナムの人はみんなやさしくしてくれた。このことがわたしにとって、一番うれしくありがたかった。

初めてのベトナムの地で出逢った人、初めての国際交流で共に過ごした人、すべての縁に感謝したい。

世界中の人々が互いの幸せを思い、国を越えてわかりあえることをわたしは願う。

## ベトナムで学んだ事

陵南中学校 2年 石丸 寧々

私は七月二十二日から二十九日までの八日間、鹿児島県青少年国際協力体験事業でベトナムへ行きました。私がこの事業に応募した理由は、青年海外協力隊の活動を間近で見ることができることです。不安もありましたが、それよりも期待の方が大きく、行く日が待ち遠しかったです。

私達がベトナムに来て最初に行った所は総領事館でした。そこではJICAの人達の活動について、くわしく学びました。

ベトナムでのJICAの仕事は、途上国の発展に日本の持っている知識や技術・資金を使って協力することだそうです。ベトナムの国土面積は日本から九州を抜いたぐらいの大きさです。人口は約九千万人と日本より少し少ないですが、それでもかなり若い国なのでこの先、もっと人口が増えると思います。

日本は、ベトナムに対する援助国の中で、一番援助額が多いのだそうです。私は日本がベトナムに対して、こんなに援助していたことを初めて知り、とても驚きました。

このJICAの事業の一つであるボランティア派遣事業に参加している後藤隊員と館野隊員に会うことができました。二人とも言葉や食べ物、人間関係などで苦労しながらも、目標を立てて努力していました。私はそんな二人を見て、自分もいつか海外で困っている人達のために働きたいと思いました。

私が一番心に残っていることは、ホームステイ先のホストファミリーとの生活でした。私のホストファミリーはいつも笑顔で、困っている時は一生懸命jesusチャーチで伝えようしてくれました。会話帳はありましたが、ホストファミリーであるおばあさんは字が読



ホストファミリーと 本人：左

めなかつたため、おばあさんと会話するのがすごく大変でした。

ホームステイ先の生活は、私の予想をはるかにこえていました。まず驚いたのは、水道から出てくる水がにごっていたことです。あらかじめ、日本での研修のときに生水は絶対に飲んではいけないと何度もくり返し注意していました。しかし、実際に目にすると思っていた以上に不衛生で、こんな水で料理や洗濯をするのかと思うと食欲が無くなりました。ホームステイ先での生活で、日本がどれ程豊かなのか、自分がどれ程恵まれているのかがよく分かりました。ホームステイ最終日に、ホームステイ先の近くに住んでいるお母さんが市場へ連れていってくれました。市場には豚の頭やカエルなど、日本には中々ないような光景が見られました。しばらく市場を歩いていると、後ろから肩をたたかれました。何だろうと思って振り向くと、五・六歳ぐらいの男の子が立っていました。その子は私に小さなバケツを差し出して、お金をくれとjesusチャーで訴えました。どうしようかと思い、ホストマザーを見るとホストマザーは、放っておきなさい、と身ぶり手ぶりで私に言い、その子のバケツの中にお札を一枚入れました。

自分より小さい子どもがものごいをしているという光景は、私はテレビでしか見たことがなく、現実にあることなのだと分かっていても、どこか遠い世界の出来事のように感じていました。しかし、この市場での出来事があった後は、もう他人事のようには思えなくなりました。

ベトナムは、発展途上国とは言ってもけっこう豊かな国だと思っていました。実際にホーチミン市には、おしゃれなお店や大型スーパーがたくさんあったから、ものごいをしている子供がいるだなんて思ってもみませんでした。

私がこの体験事業を通して学んだ事は、テレビで見て、かわいそうで終わってはいけないということ、国と国とで助け合うことの大切さです。今はまだ無理ですが、将来私も途上国のために働きたいと思いました。



バスから見たホーチミン市内の街並み

## 団員が感じたこと

### ベトナムでの一週間

鹿児島水産高校 2年 西野 奈那

私は、7月22日から29日まで国際協力体験事業の団員としてベトナムへ行きました。二回の事前研修があり、初めてベトナム語にふれました。発音が難しく、何度も講師の人に指摘されました。今回、ベトナムに行くことが決まった時に、沢山の人に話を聞いていろんなことを学ぼうと思いました。

出発当日、沢山の人に見送りをしてもらいました。ベトナムに着いた時は午後十時を回っていたのに、空港を出ると多くの人が賑わっていて日本との違いを感じました。次の日総領事館を訪問し、JICAの仕事内容やベトナムについての説明を聞きました。この中で最後のまとめの時に柔軟な気持ちを持つこと、と言われたのですが私にはあまりわからず、理解できるようになりたかったので、この言葉が一番心に残りました。また、協力隊員活動視察では作業療法士の後藤さん、村落開発普及員の館野さんたちのお話を聞きました。作業療法士の仕事は知っていましたが村落開発普及員とは、どのような仕事をするのかわかりませんでした。館野さんの説明を聞くと、村でキングマンダリンを育てていてグリーニング病に困っていること、その対処法などを教えてもらいました。2人のお話を聞いていると共通点がありました。それは、ベトナムの人は休憩が長いこと、初めて来た時はどうして働くかのだろうと思ったそうです。言われてみれば移動の時、外を見ていると座ってしゃべっているのをよくみました。それがベトナム式なのかと思い、日本との違いがまた一つわかりました。



ホストファミリーと 本人：前列左

ホームステイ先は、近くに果樹園があるとは聞いていましたが、実際行ってみると庭にココナツの木があってとても驚きました。ホストファミリーとは、最初あまり話せませんでした。それでも子供達と仲良くなりたかったので、日本の土産などをわたしたりしました。そしたら少しは、しゃべってもらいました、日がたつにつれて子供達と仲良くなれました。とくにホームステイ先のお母さんがよくしゃべりかけて沢山、指さし会話帳やジェスチャーをまじえながらコミュニケーションをとりました。ホームステイ最後の日に、子供達と折り紙をしたり、買い物に行ったり、家の周りを散歩したりと、とても楽しかったです。とくに、家の周りを散歩しただけなのに、心がスッキリしました。お別れ会では、歌をうたいみんなでご飯を食べたりしました。言葉は通じなかったのに笑ったりしているうちに少しだけ心がつながったのかと思いました。とても楽しいお別れ会になりました。翌日、本当にお別れの時がきてしまいました。ありがとう、また会いましょうと伝えて別れました。お母さんが本当に気にかけてくれたりしてとてもうれしかったです。バスの所まで見送りに来てくれました。最後まで言葉が通じなかったのに、ふり返ってみると沢山の人にありました。一週間滞在だったのに前から住んでいるような一週間でした。



バナナの木

## 国際協力体験事業に参加して

青戸中学校 2年 西 紗央里

私は、国際協力体験事業に参加しベトナムに行きました。

1番心に残っているのは、食文化のちがいです。食事のほとんどは口にあいましたが、たまに魚くさいものや香草の香りが強いものもありました。お米もあつたけど、お汁につけて食べたので日本で食べる米とは少し違う味でした。また、ベトナムには日本とは違った南国の果物がありました。私は、果物を8種類ぐらい食べました。そのほとんどが甘くて、たまにすっぱいものがありました。

ベトナムで活躍している2人の協力隊の話を聞きました。1人目は、ティエンザン省総合病院で作業療法士の仕事をしている後藤さんです。後藤さんは、「はじめ、ベトナムの暮らしに慣れなかった。1・2週間はずっと外食をしていた。」と、おっしゃっていました。「そんな思いをして途上国のために働いている後藤さんはすごい。」と、尊敬しました。後藤さんは、主に作業療法士の仕事を広めています。派遣されてすぐは、あまり理解されなかったそうですがだんだんと分かってくれたそうです。

「作業療法士になったきっかけは何ですか？」と、きくと、「手先を動かすことが好きだったから。」と、答えてくれました。私は、「職業につながるものがあつていいな。」と、思いました。また、病院で作業療法士以外の仕事も見ました。緊急外科です。ベッドは28個しかなくて、きゅうくつそうでした。肺炎や脳卒中で来る人が多いです。医療機器が足りなかつたり、こわれていたりするそうです。滅多に入れない所に入れて良かったけど、衝撃的でした。2人目は、タンビン郡植物防疫局に勤務している村落開発普及員の館野さんです。協力隊員になったきっかけは旅行で東南アジアを訪れたとき、物乞いをする子供を見て、「発展途



ホストファミリーと 本人：後列中央

上国のために働きたい。」と、思って応募したそうです。主にグリーニング病という病気にかかるないようにする工夫をベトナムの人々に教えていました。キングマンダリンというミカンみたいな果物が病気になりやすいです。収穫量は初めの年に50個ぐらいできてそれから増えていくそうです。私は、実際にベトナムで協力隊として働いている2人を見て、「生きがいのある職種を見つけられて楽しそう。私もいつかこういう楽しめる仕事につきたい。」と、思いました。

ベトナムでの1週間は、ホーチミンからバスで約2時間半のヴィントオイ村でホームステイをしました。会ってすぐは緊張してあまり話せなかったけど2日目からは、気軽に話ができます。村から歩いて約20分のヴィンキム市場に行きました。日本では、あまり見られない光景も見ました。ニワトリやアヒルがそのまま売っていたり、カエルの皮をはいたものが売っていたりしました。初めは、「きもち悪い。」と、思っていた私ですが、後になると、「これがベトナムの食文化なんだな。」と、思えるようになりました。また、鹿児島県や南九州市について話をしました。ベトナム語で紹介するのは難しかったけど、なんとか話がきました。みんな興味深々にきいてくれて、私もうれしかったです。家には、近所の人や親せきが常にいました。

現地の中学生との交流もしました。夏休みなのに来てくれました。制服は、白いカッターシャツに黒いズボン・赤いスカーフでした。「清そでいいな。」と、思いました。歌を歌ったり、記念品を交換したりしました。歌は、ベトナム語でドラえもんを歌ってくれました。記念品はかさをもらいました。外ではベトナムの遊びで、スプーンで水を運ぶゲームをしました。とても難しかったです。中学生は、みんな明るくて幸せそうでした。

私はこの国際協力体験事業に参加して外国に出て日本の豊かさ、物の多さを感じました。ベトナムの生活を体験し、「物が多いということが必ずしも幸せだとは限らない。」

と思いました。もう1度ホストファミリーに会ってたくさん話をしたいです。



現地学校交流にて

## 団員が感じたこと

### ぶらりベトナムの旅

加世田高校 3年 池田 朱里

私にとって、あの一週間は長いようで短かった。しかし、その中で過ごした日々は一生忘れられないものとなった。

ベトナム社会主義共和国。社会主義、という言葉の響きにあまり馴染みがなかった。正直、ソ連を思い出し、良いイメージがなかった。一体どのような国だろう、と事前調査を試みたとき、そういえばベトナムは発展途上国だ、とふと思った。社会主義、発展途上国。私の中の不安要素が膨らんだ。同時に、これは絶好のチャンスではないのか、と思った。日本では見れない光景がベトナムで見れるかもしれない。私はポジティブに考え、旅立ちの時を待った。

こうして振り返ってみると、たくさんの思い出が波のように押し寄せてきた。初日は、税関の人が日本でもベトナムでも無愛想だ、と思った。特にベトナムでは空気がピリピリしていて、少々息苦しかった。愛想って大事だな、と人生の教訓にした瞬間であった。それから時がたち、二日目。孵化しかけのアヒルの卵、ホビロンに衝撃を受けつつ、ホーチミンの総領事館へ表敬訪問。質問タイムの時に手を挙げた。しかし他の皆はなかなか挙げなかっただ。こういう時に手を挙げた自分はすごい、と自画自賛し、待ちにまつたホームステイ先に移動した。まず最初に思ったこと。「ここは、ジャングルか。」大変失礼極まりないが、どこを見ても緑がたくさんあり、目にとても優しい、と思った。そして家族との対面をしたのは良いが、どこからどこまで家族なのか、最初はわからなかった。翌日、鶏と喧しい放送によって起こされた。何故か朝食を二回食べさせられた。私の胃が悲鳴をあげた。この日は総合病院と町の学校へ行った。青年海外協力隊の後藤隊員は、



ホストファミリーと 本人：後列中央

作業療法士として派遣され、勤務されている。リハビリスペースは、笑顔に満ちていた。笑顔を絶やさず、仕事ができたらいいなと私は思った。一方学校訪問は、同年代の子供たちと遊び、疲れたけどとても楽しい時間を過ごした。ソーラン節を披露した。筋肉痛になつたのは言うまでもない。早いもので四日目。今度は果樹園に行き、館野隊員の活動現場を視察した。病気にかかった木を見て、かわいそう、と思った。果物を食べさせて下さった。実を言うと、家で食べた果物のほうが美味しかった。ホームステイ四日目。この日は朝から洗濯をした。相方の恵亜生と他愛のない話をしながら楽しく洗濯物を干した。家にいるお姉さんが唐突に何かを差し出してきた。日本語で書かれたテキストだった。将来、日本語教師に携わりたいと考えている私にとって、とても貴重なものだった。中身を見てみると、五十音順に平仮名、カタカナが印刷されていた。簡単な単語も記載されていて、私たちはベトナム語と日本語で教えあった。人に何かを教えるのは楽しいな、と思った。こうしてコミュニケーションをした時間が一番楽しかった。幸せは早く過ぎ去って行くものだ。翌日には村を離れ、ホーチミン市へ移動した。ホテルでゆっくり寝た。鶏の鳴き声とけたたましい放送が聞こえない七日目。この日は市内観光だった。道端で偽物のブランド財布を売っていたおばちゃんや、汚らしいおじさんがいた。日本では見られない人達に少しショックを感じた。

日記のダイジェスト版になってしまったが、それぐらい一日一日の思い出が深く、濃いものとなった。この体験事業で様々なことを学んだ。このことを親や親友に話した。ベトナムの良さを理解してもらえた嬉しさ、と思った。

今でも鮮明に覚えているのは、ベトナムの家族のことである。彼らは私を本当の家族のように慕ってくれた。彼らの愛情は私の心に広く浸透した。ベトナムに行き、家族の絆を再確認できた気がする。今度ベトナムへ行く時は、大人になった私を家族に見せたい。私は、日本とベトナムの小さな架け橋となった。



モデルファームにて グリーニング病にかかっている木

## 新しい世界

松陽高校 3年 黒坂 愛梨

高校最後の夏休みが、私にとって海外というものが身近になった。7月22日～29日の間、ベトナムで過ごした時間は、私の海外に対する印象を少しづつ変えていった。

タンソンニヤット空港に着き、バスでホテルに向かうときに窓から見た外は、夜遅い時間でも人が多く、バイクの走っている多さに驚いた。日本では見ることのないバイクの多さに、事故が起きそうで安心して見てていられなかった。

ヴィントトイ村のホームステイ先におじいちゃんに行くと、笑顔でおばあちゃんが出迎えてくれた。孫のバウ君は恥ずかしいのか隠れてしまった。そして、すぐに言葉の壁を実感した。それは、おばあちゃんが何かを伝えようと話しかけてくれたが全く聞き取れず、私がベトナム語を話しても伝わらなかった。指さし会話帳を使おうとしても文字が読めない様子だった。なんとかジェスチャーで分かり安心したが、残りの3日間が不安となったホームステイ1日目だった。

翌日、物音で目が覚めた私は時計を見るとまだ4時。なのに、ホストファミリーは、すでに起きていて、おじいちゃんはバイクで出掛けている。ベトナムの人たちは起きるのが早いと思った。

村の子供たちに名前を呼ばれるようになり、私が帰ってくると走ってきてくれたり、遊びに行くときは手をつないでくれるようになったりした頃、ホームステイの時間は少なくなり始めていた。残りの時間を私は子供たちと折り紙をして遊んだ。最初のうちは私が折っているのをただ見ていた。色々折っていると、動



ヴィントトイ村にてバウ君と 本人：左

物が人気でその中でも、ゾウが気に入ったようだったので折り方を教えると、とても喜んでくれた。最後の夜、バウ君のお母さんが会話帳で帰るのがさびしいと言ってくれて、バウ君を指さして泣くポーズをした。近づいてみると本当に泣いていて、私まですごく寂しくなり、同時に嬉しくもなった。

積極的に接すると、言葉が通じなくても相手に伝わるものがある。人の優しさは不安を無くす方法の1つで、それは人の心を温かくするものだと感じた。

青年海外協力隊の人たちの活動観察。現地の人と触れ合いながら活動している隊員の人たちは輝いていて、やりがいのある仕事をしながら目標をしっかりと持っていた。異国のこと理解することは大変だとは思うけれど、海外で活躍している日本人の存在が、国と国をつなぐ大きなものだと感じ刺激され、その姿に魅了された。

今回この事業に参加することで、自分自身の将来についてあらためて考える良い機会ともなった。私が知っている海外はほんの少しだと思う。けれど、もっと外の世界が知りたい。色々な人たちと出会って、会話をして相手のことを理解し、その国の文化や暮らしを自分の目で見てみたい。日本では味わうことのできない体験をしたい。そう思った。



ホストファミリー、バウ君の友達

### ベトナムが教えてくれたこと

志布志高校 2年 白鳥 翔子

先生からの薦めで応募した、この事業。もしあのとき、断っていたら今ごろ私はどうなっているのかと思う。ベトナムで、ホームステイをし、協力隊の姿を見て、人々の生活を直に感じていなかったら、私は自分に自信をもって積極的にはなれなかっただろう。初めての海外で、当然のように不安もかなりあった。そんな私の目に映ったベトナムが、どんな国であったか、私はできる限りの力で伝えていこうと思う。

今回の事業の最大の目的である青年海外協力隊の視察は本当に貴重だった。遠い地で、同じ日本人の方々が活動しているのを見て、そのいきいきとした表情はうらやましくもあった。まず最初に視察した作業療法士の後藤さん。作業療法士がどういうものか、周りの患者さんや同僚の方々とのコミュニケーション、これからどうしたいかということについて治療をしながら話してくれた。ベトナムに作業療法士という職種はなく、リハビリなどの技術が遅れているそうだ。後藤さんは、本来自分が担当することはない患者さんのリハビリもやっていた。また現地の医学療法士の人たちに、作業療法を教えるが、医学療法士たちにも医学療法士というプライドがあったり、古いやり方を変えない人もいたりするので大変だそうだ。でも、きっとそこにやりがいを感じているのではないかと思う。良い方向に変えていくことに関わることができるのは、労力も伴うけれど本当に貴重なことだ。後藤さんは明るく、気さくな人だった。そんな人からベトナムという遠い地で話を聞き、しかも私は一緒に弓道もできて幸せだ。

次の日、今度は村落開発普及員の館野さんの現場を



ホストファミリーとの初めて過ごした夜 本人：左

視察した。後藤さんのときも思ったが、館野さんもいきいきとしていて村の人たちとたくさんコミュニケーションをとっていた。館野さんの村落開発普及員という仕事は、いわゆる「村おこし」のようなもので、内容は多岐にわたる。館野さんは、村で栽培しているキングマンダリンという果物の収穫量のアップと、グリーニング病という植物の病気の対策に力を注いでいた。今までの粗放的な農業から、工夫をして多くの農家で成果があったと言っていた。工夫の例として、キングマンダリンの枝は、全て上に向かって伸びてしまつて陽が当たらないので枝をひもで縛り、多くの葉に日光があたるようにした。またグリーニング病とは虫から引き起こされる病気で、それがもとで枯れてしまうことがある。ちなみに日本でもあるそうだ。その対策に、グアバの木を近くに植えていた。グアバを虫は嫌うそうだ。また、グアバの実はキングマンダリンが出荷できないときの稼ぎでもある。一通り視察したあとに、農家の方にキングマンダリンのジュースとグアバをごちそうになった。とてもおいしく、私は特にグアバを唐辛子につけて食べるのが好きだった。

二人の協力隊の方の現場は、日本と比べて当然良くはない。それでも、隊員のお二人はとても楽しそうに活動していた。これから、ベトナムという国が十年後、二十年後どうなっていくのか見てみたい。そのときの私が、あわよくばベトナムや東南アジアに少しでも関係していることを願いながら。



バイクが多かったホーチミン市

## ベトナムで得た大切なものの

大島高校 3年 恵 亜生

私は、今回のベトナム訪問を通して、「人って、こんなにも素晴らしいんだな」と改めて感じました。それを一番感じさせてくれたのが、ホストファミリーでした。ホームステイ初日、私は、ベトナム語が通じるかという不安と家族に馴染めるかという不安でいっぱいでした。でも、お母さんの優しい笑顔を見たら、不安は一気に無くなって、すごく温かい気持ちになりました。何だか、日本の家に帰ってきたような気がしました。ステイ先で出迎えてくれたのは、息子さんと、その奥さんでした。二人ともすぐ笑顔で遠くの道からでも、それがわかりました。息子さんは難聴者だったんですが、一生懸命、私達に話しかけようしてくれて、とても嬉しかったです。その後は、親戚の方々が沢山来てくれて、楽しい初日を過ごすことができました。ベトナム人が、どんな性格かわからなかったので初めは、ちょっと怖いイメージだったのですが、みなさん、とても優しくて自分の持っていたイメージを申し訳なく思いました。

次の日の朝は、すごく新鮮な気持ちで目覚めました。外は、まだ薄暗くて、お母さんの話す声が聞こえました。ベッドから出てみると、みんな、もうすでに起きている、日本との生活の違いにちょっと驚きました。私がテレビを見ていたり、家の中を周っていると、お母さんが来て色々と説明してくれました。言葉は少ししか通じないけれど、それを感じさせないぐらいに、お母さんの愛情を感じました。朝ご飯も、すごく多くて、これでもかと言うぐらいの量を食べさせられました。お父さんとは帰る一日前にしか会えなかったので



もう一つの大切な家族と

ですが、今思えば、一日で十分だった気がします。それぐらいすばらしいお父さんでした。村を離れる前の夜の食事会で、お父さんは他の男の人からお酒を飲みに行こうと誘われていたのに、私達と一緒に食事をすると言ってテーブルに残っていました。その時は、嬉しそうに泣いていました。料理の名前や食べ方を何から何まで説明してくれたり、指さし会話を使って日本の事を聞いてくれました。本当に最高のお父さんです。

お別れの日。一番来てほしくなかった日です。集合場所への道で、私はすでに泣いてしまいました。いつも通っていた長い道が、この日だけは短く感じました。お母さんが抱きしめれば、抱きしめる分だけ涙が溢れ出て、別れが辛かったです。いつも笑顔だったお母さんの顔にも涙がうかんでいました。お母さんは「二人とも、自分の子供のように愛くるしいです。」と言ってくれました。その時、私は「またここに来て、今度は私がお母さんがしてくれたように沢山のことをしてあげよう。」と心に決めました。このプログラムを通して、人の温かさや可能性を多く感じる事ができました。私も、いつか誰かにそう思われるような人になって、沢山の人を幸せにしたいです。



ホームステイ先にて

## 団員が感じたこと

### はじめての経験

加治木高校 1年 千竈 佐保

私は、この体験研修でたくさんの人とふれあいました。今まで考えていなかつたことを考えさせられました。

まず、初めて海外に行くという経験をしました。どんな所か分からなくて不安もありましたが新しいことにチャレンジできる楽しみも大きかったです。

そして、ベトナムに着きました。ベトナムの第一印象は人が多くてバイクが多いなと思っていました。ベトナムについてしていくとだんだんと見方が変わっていました。

私のベトナムについて見方が変わった一つ目は、協力隊員の方が働いている姿を見てからです。まず、作業療法士をやっている後藤隊員の職場はリハビリ科でした。日本では、一人一人に合わせてリハビリのやり方を変えるけどベトナムでは、足が悪かったら、その足のリハビリでどこが悪いか関係なく同じリハビリを全員にやるそうです。また、個人のカルテはあるそうですが、まだ詳しくカルテに記入できないのでそこを改善したいとのことでした。また、患者さんが気のむくまま來るので手いっぱいになることがあるそうです。

次に、村落開発普及員の館野隊員を視察しました。館野隊員はキングマンダリンをグリーニング病から守り収穫量を増やすために働いていました。日本では木を横に伸ばすのが普通だがベトナムではなにもせずに伸ばすのではうき型になっていたらしい。それをなおして収穫量を増やしている。どちらの話もし聞いて日本では当たり前になっている事だけど国によって考え



ホストファミリーとの初めての1枚



人生初めての釣り ヴィントトイ村にて

方は違うんだなと思った。隊員の方々は、それを否定することなく進歩させるために技術や考え方を教えていたんだと思った。また、ベトナムの人もその考えを否定することなく、自分自身が進歩するために受け入れているのがすごいと思った。

そして、二つ目に見方が変わったのは、ホームステイの家族と過ごしている中でのことです。最初は、自分自身も恥ずかしくて話しかけることができませんでした。ですが、だんだんとふれ合う時間が長くなるにつれて、向こうから話しかけてくれるようになりました。でも、ベトナム語が分からなくて指さし会話帳を必死に探してくれる姿を何度も見て自分がなきれないなと思う瞬間がたくさんありました。また、私が紙ふうせんや折り紙、似顔絵を描いてあげただけで、お土産と言って、たくさんの物をくれたときも、申し訳ないと思いました。ベトナムは、まだまだ発展途上国だけ今、自分達に足りないものを吸収しようと努力している途中なんだと思いました。三十年前まで戦争をしていたなんて考えられないなと町を見て感じました。

私は、ただ発展途上国という言葉だけでベトナムをイメージしていたのですごく都会だと最初思っていました。だけど、今のような町にするために、たくさんの努力をしてきたんだなと改めて考えさせられました。

私は、これからは言葉だけに惑わされることなく、自分の目で見て感じていくことが大切だと思いました。この体験をすることができる、世界はまだまだ知らないことがたくさんあると思いました。インターネットで調べた情報なども時には必要だけど、自分の目で見て、肌で触れて、自分でその国について感じることは、じぶんだけにしか分からない新たな情報になると思いました。

## 一番思い出深かったこと

種子島中央高校 2年 林 みな子

私が1番印象深かったことは病院の視察です。病院では、日本でいうICU（集中治療室）に行ったり理学療法士の後藤さんのお話を聞いたりしました。ICUでは、家族も入れないといわれていたのに中に入れていただきました。わたしの想像では、人が入りきれないほどいて狭くて衛生的ではないと思っていた。実際は全然違っていて広く、1人1人ベットに寝ていてすごくキレイでした。病院の人が、患者さんの病気についてどのような治療をしているかなどを詳しく話してくださいました。最初は、プライバシーにかかわることをそんなに言ってもいいのかとまどいました。どうかはわかりませんが、それがベトナムなのかなあと思いました。

病院の外観は、入口や駐車場のところはキレイだと思いましたが、中に入っていくと中庭らしい所などは草がぼうぼうだったり、壁が少し壊れたりなどしていました。日本はベトナムの病院と比べるとキレイでわたしの中では安心感があると思いました。

後藤さんの活動を見て、異国の地に1人で出向いてその国の人たちのためにつくすのはかっこいいと思いました。ベトナムの人にはリハビリをするという習慣がなく、手術をしたりしてもすぐに退院するそうです。日本では、日常生活が少しはおくれるくらいまでリハビリをしてからの退院なので家族にかかる負担が少ないけどベトナムでは退院してからも大変だということを聞きました。リハビリに来ている人はほとんどが脳卒中の患者さんだそうです。

リハビリに来る人は時間を病院側が決めても自分の好きな時間に来るので、すごく忙しいときとそうではないときがあるそうで、今それを改善できるように後藤さんが計画しているそうです。リハビリに来ている人もみんな笑顔で楽しそうでした。後藤さんのお話を聞いていて2つとも印象深かったことがありました。1つめは、ベトナム人の人は皆ではないけれど薬指と中指が、つながっているということです。きき手は、手術をして治すけれど、きき手以外は治さない人が多いそうです。作業をするときなどつながったままでは不便ではないのかと思いました。日本では必ず治すと思うのでベトナムと日本の違いを発見できまし

た。2つめは、家族が入院中の患者の食事や排泄のお世話をしなければいけないことです。看護師は医療的なことしかないと聞いて、食事とかは特に気をつけなければいけないのではないかと思いました。病室には、家族が集まっているのが病人かわからない時があるそうです。ずっと看病していなければならぬのなら、家計は大丈夫なのかと1番思いました。日本では、すべて看護師がやってくれて、1人1人にあわせた食事をしてくれるので安心であり家族がいつもどおり働けるので違うなあと思いました。

わたしは、ベトナムはもっと貧困がすごい国だと思って行ったので実際見て水道もあるし電気もあるし、食料も豊富で日本ほどではないけれど豊かだなと思いました。

後藤さんを見ていて、将来私も発展途上国の人々のために役立つことをしたいと思うようになりました。



ティエンザン省総合病院入口にて



ホストファミリーと本人：右から2番目

# 団長報告

## それぞれの成長～団長の日記より～

青年海外協力隊鹿児島県OB会  
会長 桑山 昌洋

ホーチミン、タンソンニヤット国際空港のロビーから出て、今回の旅でお世話になる渡邊さんと現地ガイドのホアンさんと挨拶を交わしながら、他の団員が出てくるのを待つ間、私が額に汗をかいていたのは雨季に入った熱帯特有の肌に粘りつくような暑さのせいだけではなかった。

ベトナムに着いてしまった。まいったな、軽々しく団長なんか引き受けるんじゃなかったよ。もっと相談しておけばよかったなあ。だいたい、いつもの年ならただ鹿児島で待ってりゃよかったのに団員が研修で練習したベトナム語は果たして通じるのか？（多分通じない）団員は1週間を無事に過ごせるのだろうか？（きっと誰かが熱を出す）“団長”って何すりやいいんだろう？（これが最大の疑問）。ここにきてもまだ、腑甲斐ないことに、愚痴も不安も尽きなかったのである。

ホーチミン市内のホテルに着き、明日の打ち合わせと見回りを済ませベットに入ってもまだ落ち着かない。“なんとかなるよ”と言いいながらここまでできてしまった。私は元来心配性なのに、回りの人はそう思っていないのは、私が“アマノジャク”だからだ、ということに気がついた夜だった。

領事館表敬では日田領事と石田JICA事務所長に団を代表して挨拶。ベトナムと日本のかかわりについて話を聞く。団員それぞれが自分が今訪問している国、ベトナムについて改めて興味を持ったと思う。また、石田所長が子どもたちへ向けて語ってくれた“国際人になるための条件”は、子供達の将来への目標と指針を含んでいて素晴らしい。余談だが、ここで寝てた団員は将来大物になるかもしれません。小物の私はハラハラしっぱなしだった。

協力隊員の活動視察では一人目は病院で作業療法士として活動中の後藤沙織隊員。ここでも、副院長とりハビリ科の代表に挨拶。二人目は農村部で村落開発普及員として柑橘類の栽培方法の普及に取り組む館野友



現地学校交流にて 本人：左

子隊員。二人とも現場に溶け込み、現地の人々に受け入れられて活動し、実に輝いた表情をしている。両隊員は制約のある中で様々な問題に対して挑戦を続けていたが、それこそが協力隊の醍醐味でもあるのだ、だからこそ輝いて見えるのだ、ということに多くの団員も気付いただろう、と思う。

ホームステイ先では、まずホストファミリーや人民委員会の代表を前に団を代表して挨拶。その後、各家庭を訪問。団員たちにはやはり言葉の壁が立ちはだかったようだが、いろいろなやり方でそれぞれに交流を深めたようだ。ホームステイ先での暮らしがヤモリの泣き声を聞きながら眠り、鶏の泣き声で目を覚ます毎日。ここでの暮らしが厳しいかもしれないが、どの家庭も団員を家族として暖かく迎え入れてくれた。村を離れるときに、もう一度訪問したいと言ってた団員は、交流を継続させて、ぜひ再訪問を実現させて欲しいものである。

ホーチミン市内の見学をする際、特にサイゴンと呼ばれていた頃の多くの興味深い場所を見学した際には歴史の舞台になった街なのだな、と改めて思うことしきりであった。団員にはここベトナムの歴史は昔の出来事なのかもしれないが、世界を見渡せば様々な歴史が、現在もあちこちで生まれている事に気付いて欲しいと思う。

この事業に協力隊OBの一人として関わるようになり、生徒たちが成長して帰国する姿を見てきたが、今回、その成長の過程を自分の目で見ることができた。体験事業の経験を糧に、団員が世界に目を向け、想像力を持って考えようになるなら、この事業の目標はほぼ達成できたものと考えてよいのではないか、と思う。

帰国後、挨拶以外で団長の役割とは何だったのか？ということを考えてみる。一言で言うと、心の奥ではハラハラしながら、表向きは何事もなかったかのように振舞う事ではなかったかと思う。

もしそうであるなら、その役割は期せずして果たされていたはずである。

なにしろ私は、ベトナム一日目の夜に気がついたとおり、“アマノジャク”だったのだから。



ヴィントオイ村ホストファミリーとの対面式にて 本人：右

# 同行者感想

## ベトナム訪問に同行して

(公財)鹿児島県国際交流協会  
事務局長 森山 健二

ホームステイの集落の入り口にバスが到着した。私たち一行は、バスから降り、ジャングルのように生い茂ったパパイヤなど南方系の樹木の中を、大きなキャリーバックをガラガラ引きずりながら、細い小径に沿って一列に並んで進んだ。ホストファミリーの家々は、一軒一軒、樹木の中に包まれるように点在していた。私の目から見ると、それぞれの家の雰囲気は、昔の日本の田舎の家とそれほど変わらない。私は山里の小さな集落で育ったが、幼少の時は、便所は母屋とは別の外小屋にあった。床下では鶏が飼われ、朝食の卵焼きの材料はそこから調達していた。犬は自由に歩き回り、好きな所に寝そべっていた。ホームステイの村での数日間の生活は、そんな昔の思い出をよみがえらせた。

「となりのトトロ」世代に近い私には、そのような郷愁を覚える感があったが、子供達はどう感じたのだろう。汗まみれなのに体を洗う水が出てこないハブニング、壁を這うヤモリや寝床に近づいてくる虫などを見て、最初は、早く家に帰りたいと思ったかもしれない。あるいは、自分たちの日頃の生活環境がいかに便利で快適なものか、あらためてかみしめたかもしれない。そこに、この体験事業の醍醐味があると思っている。その地には、その地の気候、風土にかなった生活様式があり、風習がある。不便に見えても、ある種のゆとりが感じられる。短い期間ながらも、現地に滞在し、日本とは異なる文化、人々の営みを、実際に自分



現地学校交流にて 本人：右



ヴィントオイ村にて 本人：左

の目で見て、肌で感じたことは、子供達にとって、視野を広げるとともに、自分の周りを新たな視点から見つめ直す良い機会になったと思う。

また、異国の地で、その人々のために少しでも役立ちたいと汗を流しがんばっている青年海外協力隊員の活動現場を訪れ、話を聞くことができたことも、子供達には大変貴重な体験だったと思う。日本とは異なる生活習慣や仕事への取組姿勢に時には戸惑いながらも、熱意と強い意志を持って、それをどうにか理解しようと努め、その国に溶け込みながら、自分の役割を一生懸命果たしていく隊員達の姿は、子供達の目にはきっと輝いて見えたに違いない。

子供達は、今回、普通の旅では得られない貴重な体験を得た。この体験が、彼ら彼女らの今後の成長にどうつながっていくか、実に楽しみである。それはすぐに形として表に出てこないかもしれないが、それぞれの個性に合った時間を費やしてじっくりと自分の中で熟成させ、いつか、ベトナムの果実のように味わい深い、そして心豊かな人間に成長していくことを願っている。

最後に、青少年の育成に深い御理解をいただき、この事業の実現にご支援、御協力を賜りました皆様に、心から感謝申し上げます。

## 同行者感想

### 鹿児島県青少年国際協力体験事業の効能

山下 美穂

鹿児島県青少年国際協力体験事業。この体験事業に参加して、自分の進路を見つける人、自分の進路を再確認する人もいると思います。今回の報告書で、自分の進路を見つけた人について書いてみたいと思います。

この体験事業と私の出会いは今から11年前、青年海外協力隊員としてベトナム中部の地方都市フエに助産師として赴任し、約半年が過ぎた頃でした。この年の体験事業の訪問先はベトナムのホーチミンでした。私は鹿児島県出身者という縁があり、ホーチミンで行われた懇親会に参加する機会を得ました。

懇親会の席で、団員の中高生の方々と話をしましたが、正直なところ誰とどんな話をしたか覚えていません。ただ、団員の皆さんには鹿児島弁を喋る人がベトナムに住んでいるのが不思議そうであり、私も半年ぶりに鹿児島弁を喋る集団に接して、自分がどこにいるのか不思議な感覚になりました。言葉は通じて意思疎通できますが、言葉+ $\alpha$ はそれ以上のものであること、鹿児島からの団員の皆さんに体験させてもらいました。またこの時は、任地フエに入って以来半年ぶりの都会、それもベトナムの大都市ホーチミンに来たいうことで、空港からホーチミン市内に入った時は「凄い！ニューヨークみたい！」と興奮しました。また街中でロッテリアを見つけた時、速攻入店し、久しぶりのフライドポテトを注文しました。「美味しー！」と、感動しながら食べた記憶と恥ずかしい写真が残っています。日本にいると特に食べたいとは思わないから不思議です。

さて、時は巡り協力隊活動が終了しベトナムから帰国して数年後、私は体験事業の同行者としてベトナムに行く機会を得ました。その時の団員の一人が、今回の事業で大変お世話になったベトナム在住の渡邊君です。彼はこの体験事業でベトナムが大好きになり、その後、現地で働くことを望み、暮らし始めたのです。この事を聞いたとき、ベトナムが大好きな私はとても嬉しく、また、あの1週間は人生にこんなにも大きな影響を与えるものであったのかと、『凄いなあ体験事業！』と非常に感慨深かったのを覚えています。

それから数年後のとある祝賀会の席のことです。私の隣に座っていた高校生は、体験事業に参加した時

のことを発表されたのですが、話の内容を聞いてびっくり！彼は体験事業に参加した時に協力隊員と話をした事をきっかけに看護師になろうと思ったというのです。その協力隊員が私でした。

それが私だと確認したキーワードは『バナナ』。途上国の病院で、給食がある施設は非常に少ない。ベトナムでは、病院の敷地内にあるかまどで食事を作ったり、近くのお店で買ったりと、家族が患者さんの食事の世話をしています。遠方から来ている患者さんの家族は、農作業があつたりして付き添えない場合や、かといって患者さん本人が自分で買うお金があまりない場合もあります。そんな時よくみた光景が、患者の枕元にバナナが1房。朝1本、昼1本…食べていく。そう、この『バナナ』の話をその高校生がした時、枕元の緑色のバナナの記憶とあの頃の私が鮮やかに蘇ったのです。他人の記憶にあった11年前の私です。といえば、悩んでいたなああの時。

体験事業参加時、中学生だった彼はその後、看護師になる道を目指し、偶然再会したその時は、看護師国家試験を間近に控えたもうじき卒業の時期でした。卒業旅行に、ベトナムに一人旅をして、あの時ホームステイした家に行ってみるつもりだと言っていました。その後、無事訪ねることができたと嬉しそうな報告を聞きました。よく見つかったね！と思ったら、実はこの時既にホーチミンに住んでいた渡邊君が、一緒にホームステイ先を探してくれたということです。体験事業体験者同士のつながり、素晴らしい！

このこと以外にも沢山の出来事がこの体験事業を通して起こっていると思います。今回の体験事業で団員の皆さん、何名もの隊員の方々と交流を持つ事ができました。2年という任期の間に何ができるか？どうしたら上手くいくのか？と日々悩んでいるであろう協力隊員が、自分が働いている「場所」、自分が一緒に働いている「住民」、働いている「自分」を見てもらう「生の隊員」像を見せてくれました。それは意図してみせる自分の姿ではない、そんな姿を“見せて”もらえる幸せ、 “見て”もらえる幸せ、そして、その時を思い出させてくれる幸せ。

今回の団員の皆さんにどんな出来事が起こっていて、これから起こるのか？

楽しみです♪



ティエンザン省総合病院にて 本人：後列右

## 次の一步へ

力竹 貴子

私は6年前にも鹿児島県国際協力体験事業のベトナム（北部）訪問に同行させていただきました。その後3年間は事務局のスタッフとして、そして今回また調整役として同行することになり、この事業には5年にわたり関わらせていただいている。

毎年感じるのは、やはり参加者たちの大きな成長です。

青年海外協力隊員の活動を見てみたい、将来海外で働くためのヒントを得たいという熱い思いから参加する団員だけでなく、中には両親や先生に進められて参加しましたという団員もいます。それでも皆が抱える、初めて会う仲間との研修や初めて訪問する外国での1週間にに対する緊張や不安といったものは計り知れないものがあると思います。ただ、その緊張感や不安を楽しみや期待に変えるだけの力が、この事業の参加者たちにはあるのです。

団員たちに変化が見られる場面は、研修中の語学習得中であったり、ホストファミリーや現地の学生達との交流の中であったりとそれぞれ違います。

ホームステイ先でその造りが気になり、同行者に相談して他の家族のところでシャワーを借りていた団員は、3日目には「やっぱり自分の家で入ります」と伝えてきました。

最初の協力隊員活動訪問では見学するだけだった団員が、ホーチミンでの交流会では積極的にベトナムでの暮らしなどについて質問していました。

日に日に指さし会話帳の使い方も上手になっていきます。

家を訪問する同行者から「大丈夫？ どんなことして



ホームステイ先にて 本人：左

過ごした？」と声をかけられていた団員のほとんどが、次の日からは「今日は学生が訪ねてきました」「市場に連れて行ってくれるみたいで、行っていいですか？」と自分たちから報告してくれるようになります。

またベトナムの方に教えてもらうだけでなく、団員同士で切磋琢磨する様子もうかがえました。中学生が年上の団員にただ頼るだけでなく、高校生の積極的な姿勢や海外への思いに触れて学ぶことも多かったようです。

この事業で参加者のみなさんは、本当に多くのことを気づき学びを得たと思います。それは日本においては経験できないことばかりです。両親や学校の先生、周りの方々に感謝し、自分自身の勇気に誇りを持ってほしいと思います。

しかしこの経験も、ひと夏の楽しかった経験となるのか将来の自分につながっていくのかは、当然のことながら自分次第です。

これまでに参加した団員から「JICAに入りたいので大学受験がんばりました」「国際協力系の学部に進みたいと思っています」といった報告を受けることもあります。しかしそういった進路を選択することだけがこの事業の成果ではなく、たとえ海外と全く関係のない職に就こうとも、ホームステイ先で受けた心からのものでなしや異国でコミュニケーションをとることの難しさを身をもって体験したことを生かし、同じように海外から日本に来られた外国の方々に親切にするだけでもこの事業に参加した意味があるのではないかでしょうか。ぜひ自分の力を信じて、自分に合った新たな1歩を踏み出してほしいと心から願っています。

最後になりましたが、私にとっても学ぶことが多いこの事業に参加させてくださった弓場会長を始め関係者の皆様、団員、同行者のみなさん、ご迷惑をおかけすることもありましたが有意義な時間を過ごすことができました。私もまたこの経験を今後生かしていくたいと思います。ありがとうございました。



現地学校交流にて 本人：右

## 同行者感想

### 思い出深いベトナムでの日々

南日本新聞社会部 記者  
福盛 三南美

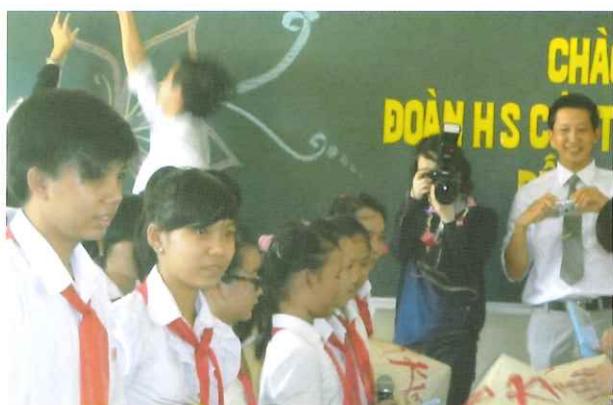
うっそうと茂るパパイヤやバナナの木、寝るときも開け放たれた窓やドア。蒸し暑い気候の中で、生徒たちとともに過ごしたヴィントオイ村での生活は、同行者の私にとっても、思い出深いものとなった。

初めて訪れたベトナムでは、車窓から見えるミニバイクの大群、豊富な魚介類の食事など、目に映るものすべてが新鮮だった。生徒たちが感じた発見や驚きは、おそらく自分自身と重なる部分が多くつただろう。パソコンや携帯電話をまったく使わず、豊かな自然に囲まれた生活を送る中で、自然とゆったりした気分で過ごす時間が多くなっていた。

最初は緊張していた生徒たちだったが、言葉が十分に通じない中でも、それぞれの方法でコミュニケーションに励んでいた。どの生徒も家族に意思を正確に伝えられないもどかしさや、どう接したらいいのかという迷いを感じていただろう。

私自身もベトナム語の勉強が足りず、ホームステイ先では自分の名前を紹介するのが精一杯だった。取材が一息ついた屋下がり、ステイ先のお父さんと会話帳を指差しながら、一言一言話したのを覚えている。ちょうどベトナムでは戦死者追悼の日が近く、お父さんは南北統一のとき軍隊について、戦場に行く前に終戦を迎えた、と教えてくれた。同年代の4女さんを交えての会話も、時間はかかったけれど、笑顔の絶えないものだった。

ホームステイ先のほとんどは農家。日が暮れて、生徒たちの様子を見に行こうと、懐中電灯とカメラを片手に家を出た。家々をつなぐ一本道には電灯がほとん



現地学校交流にて 本人：右から2番目撮影中

どなく、道に迷うことも。昼間は人懐っこい飼い犬たちが、夜になると番犬の役割を忠実に果たし、容赦なくほえられたのは苦い思い出だ。ホームステイ先はどの家族も、果物やお菓子でもてなしてくれ、身ぶり手ぶりで「ご飯食べて行く？」と気遣ってくれた。ベトナム人の温かさにふれた気がした。

地元の中学校との交流会も印象に残っている。日本人の来校を楽しみにして、いきいきと目を輝かせているベトナムの生徒たち。首飾りや果物などを準備して、歌や踊りで楽しませてくれた。長縄やゲームを通じて、両国の生徒がともに交流する姿は、わずかな時間ながら国を超えた友情ができたのを感じさせてくれた。

日本とは食事や生活様式が異なるベトナム。家族や近所との結びつきを大事にする人びとの姿勢は、鹿児島の祖父母の生活と同じだと思った。今やベトナムのことは、インターネットやメディアなどを介して知ることができる。だが実際に足を運び、その雰囲気を肌で感じ、人びとと交流した経験は、どんなものにも代え難いものになるはずだ。

駆け出しの記者である私も、ヴィントオイ村で感じた人びとの温かさや驚きを、これから仕事や人生に生かしていきたいと思っている。貴重な体験をさせていただいた関係者のみなさまに、心から感謝申し上げます。



ヴィントオイ村にて 本人：右

## 同行取材を終えて

(株) 鹿児島放送 報道制作局報道部  
記者 松本 直也

「ベトナムに行きたい奴いるか……？」6月初旬、月曜日の部会で部長が言った。「あっ、俺行きたいです。」私の手は自然に上がっていた。“自分が参加しなければ”当時はそんな気持ちだったのを覚えていて、この事業の目的など何も知らない状況で自分がとった行動をいま振り返っても不思議に思う。しかし、記者という立場でいま自分に何ができるのか、今回の事業はそう考えさせられる特別な夏となった。

出発の日、16人の中高生が大きなスーツケースを持ち鹿児島空港に集合するところから取材は始まった。わずか8日間で、中高生たちはどう成長するのかー。その一部始終を映像に残し、帰国してから放送につなげることができるのかー。不安ばかりのなか、さらに、初めて自分ひとりで取材をするということも私の不安を助長させた。

韓国を経由してベトナム屈指の大都市ホーチミンに降り立った。目に映ったのは想像以上に開発が進んでいる街の様子。宿泊したホテルの周辺には高層ビルが立ち並び、ブランドショップも点在している。道路では無数のバイクに混じり、高級車が走っている様子も頻繁に見られた。確かに舗装されていない道路もところどころ見られたが、これが開発途上と言われている国なのか？中高生たちも驚きを隠せない様子だった。

しかし、ホームステイ先のヴィントイ村へ到着するとホーチミンとは打って変わり、開発途上の現状を身に染みて感じるようになる。ガスコンロ、冷蔵庫はなく、風呂もお湯が出ない。飲料水も店で購入したものしか衛生上、飲めなかった。ホームステイ初日、中高生たちは笑顔でいたものの時折、困惑した表情を浮かべた。生活レベルの差を感じたのだろう。そして、私と一緒にホームステイをした男子中学生は言葉の壁に苦しんだ。ホストファミリーと会話ができぬ。「もう分かんない…」彼がカメラ越しに発した一言。そのときの苦労が集



ディエンザン省総合病院にて 本人：中央にて撮影中

約されたものだったのだろう。その言葉と彼の表情が最も印象に残っているシーンの一つだ。

そして今回の事業の大きな目的が青年海外協力隊の活動を視察すること。私の大学の先輩も参加していて遠い存在ではなかったが、活動を直接見るのは初めてのことだった。

ベトナムで目にした隊員の姿は、現地の人のために生き生きと活動している様子だった。“作業療法を確立させたい”“果物の栽培技術を根付かせたい”大きすぎない目標を持ち、異國の地で活動を続ける隊員の表情からは迷いや不安などは感じられなかった。その様子を見て、自分には到底できそうにないー。だからこそ、隊員がどのような支援をしているのか。どんな苦労をしているのか。鹿児島で伝えなければならない。そして、活動を理解してもらわなければならぬ。記者だからこそできる支援はこういうことだと強く感じた。“伝える”という意味を考えさせられる特別な日となった。

帰国後、KKBスーパーJチャンネルで現地での様子を3回に渡ってお伝えした。そして振り返り思うことは、一緒にホームステイをした男子中学生以外のほかの中高生たちはどうだったのかー。もっと青年海外協力隊の仕事を見せたかったー。など伝えきれなかつた悔しさが残る。

しかし、帰国後の中高生たちの表情は初日とは全く違う表情を見せていて、たった8日間で一回りも二回りも大きく成長していることを感じた。こういった表情を視聴者が見て感じてくれたかは分からないが、来年、この事業に参加したいと思ってくれたら幸いだと思う。

最後に、私にとってベトナムに行くのも、1人で取材に行くのも初めての体験だった。これを機に特集を作ることが楽しく思え、近いうちに大きな特集を作つてやろうと目論んでいる。もちろん、自分で撮影して！貴重な体験をさせて頂いた関係者の皆様に、お礼申し上げます。カムオン！



鹿児島放送にて 帰国表敬訪問時 本人：右

## 第14回（平成17年度）参加者 派遣国：ベトナム

渡邊 博人

私は、この体験事業に参加した事がきっかけで、ベトナムに住み始めて4年になります。

私が参加した回にホームステイ先となった場所は、少数民族の居住する地区で、洗濯やお風呂は川という現代の日本から数十年遡った時代の様な環境で大きな衝撃を受けたのを覚えております。

この時の体験を通して私が考えさせられたのが、「幸せとは何か」という事です。

物が溢れて裕福な暮らしをしている日本とは対照的に、村の人達の生活レベルは日本より低いのにそこから感じられる貧しさが無く、自分たち以上に幸せそうに暮らしている人々の姿がありました。一番の要因はお金だけでは得られない大切な物がそこにはあったからだと思います。まだベトナムは家族の繋がりが強く互いを大切にしております。昔の日本もそうだったので無いでしょうか。当時は、青年海外協力隊員の活動の様子を見て、将来海外に出て途上国の人々の手助けをして行きたいと考えていた時期もありましたが、今ではまず最初にやるべき事は自分の家族を大切にする事、その周りの人達を気にかけ大切にして助け合っていく事が次に繋がっていくのだと実感しています。

今回、学生の皆様とはあまり会話をする機会がありませんでしたが、普段の生活の中では感じる事の出来ない、貴重な体験を通して考えさせられた事もあったのではないでしょうか。

これから、それぞれの目標に向かって進学、就職と進んで行く中で行き詰まったり、悩んだりする事が必ずあるかと思います。

でも目標へ到達する為の道は一つではありません。沢山学び体験し視野を広げておくと、目標への道筋がいくつか見えて来るはずです。周囲の大人の意見も取り入れながら将来の目標に向かって焦らずゆっくり歩んで下さい。

末筆ながら今回参加された団員、実行委員会及び、協賛頂いてる企業の皆様のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

# 「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

## 1 楽 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に還元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

## 2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

## 3 派 遣 先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

## 4 派 遣 者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

## 5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

## 6 経 費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

## 鹿児島県青少年国際協力体験事業の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル, サリマンドゥ)	平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 阿久根市, 名瀬市, 市来町, 伊集院町, 祇答院町, 内之浦町, 佐多町	公募
第2回	マレーシア (スブルンペラ)	平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 鹿屋市, 大口市, 指宿市, 隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 加世田市, 三島村, 隼人町, 志布志町, 高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン, パシールカリキ)	平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市, 出水市, 指宿市, 垂水市, 菱刈町, 霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市, 国分市, 須恵町, 宮之城町, 隼人町, 吾平町, 根占町, 中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイビン, バリットムントリー)	平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 東市来町, 伊集院町, 郡山町, 日吉町, 吹上町, 金峰町	市町村 推薦
第7回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市, 大口市, 国分市, 菱刈町, 姶良町, 蒲生町, 溝辺町, 横川町, 栗野町, 吉松町, 牧園町, 隼人町, 福山町	市町村 推薦
第8回	タイ (アユタヤ, ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市, 指宿市, 加世田市, 喜入町, 笠沙町, 知覧町	市町村 推薦
第9回	タイ (チェンマイ, メーカンポン)	平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 国分市, 垂水市, 祇答院町, 財部町, 末吉町, 串良町	市町村 推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン, フーホイ)	平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市, 出水市, 加世田市, 国分市, 垂水市, 祇答院町, 溝辺町	市町村 推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン, タンビン)	平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 枕崎市, 国分市, 垂水市, 溝辺町	市町村 推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマー県を 予定していた)	平成15年 SARS及び鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第13回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, トレングン州)	平成16年 7/19(月)～7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市, 枕崎市, 国分市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第14回	ベトナム (ハノイ, ホアビン省 モーハイ村)	平成17年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 枕崎市, 串木野市, 国分市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第15回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, サバ州)	平成18年 7/22(土)～7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市, 枕崎市, 霧島市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第16回	ベトナム (ハノイ, バクザン省 バクニン省)	平成19年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 枕崎市, いちき串木野市, 霧島市, 南さつま市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン省 ポンミー村)	平成20年 7/20(日)～7/27(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南さつま市, 南九州市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン省 ナーソン村)	平成21年 7/19(日)～7/26(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, いちき串木野市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第19回	インドネシア (南スマラエシ州 ビナバサ村)	平成22年 8/1(日)～8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市 南九州市, 南さつま市, 枕崎市 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第20回	マレーシア (クランタン州 クバンテラガ村)	平成23年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, いちき串木野市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第21回 (今回)	ベトナム (ホーチミン, ティエンザン省 ヴィントオイ村)	平成24年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南九州市 南さつま市, 枕崎市 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
	計5カ国	計 (252) 平均13人			



二編集・発行＝

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会  
〒892-0816 鹿児島県鹿児島市山下町14-50  
かごしま県民交流センター1階  
公益財団法人鹿児島県国際交流協会内  
担当:田丸 奈保子、大内田 祥子

TEL:099-221-6620 FAX:099-221-6643

裏表紙デザイン:黒坂 愛梨(鹿児島県立松陽高等学校)

鹿児島県青少年国際協力体験事業

Kagoshima Prefecture International Cooperation Youth Experience Program  
主催 青年海外協力隊鹿児島県OB会 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会  
(財)鹿児島県国際交流協会